

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

Black+Widow
ブラック
ウィドウ
黒衣の暗殺姫



小説 巨道空二

挿絵 竜胆

序章	黒衣の暗殺者	006
第一章	ベールに隠された秘密	014
第二章	引き裂かれた黒衣	046
第三章	闇に咲くバラ	101
第四章	陰花うごめく	152
第五章	黒衣の聖女と白濁の隸女	198

登場人物紹介

Characters



ブラックウイドウ

常に喪服とベールを身につけている謎の暗殺者。八の暗殺術を駆使するといわれ恐れられている。

ミカエラ

ディヴィス領国の姫。病弱ということであまり人前には姿を現さない。

シェリー

ミカエラのお目付け役。女戦士。

マルト

ミカエラの弟。過去に起きた襲撃事件により、行方不明となっている。

ガレリア

ディヴィス領の隣国を統治するアルキード侯お抱えの女魔術師。アルキード侯の信任を背景に、絶大な権限を握っている。

鎖で壁に繋がれた少女が悶えながらも必死で反応しまいとしているのを、女魔術師は面白そうに見つめる。口枷で封じられた台詞を知りたいといった風情だ。

「もとから人一倍感覚の鋭敏な人間じゃろう？ お主は。今までつとめて肉欲から離れて生きてきたのじゃろうが。お主の弱点は肉欲じゃ。思い知らせてやろうぞ」

乳首をつままれるとそれは今までになく硬く尖っていた。乳輪も濃く色づいてその存在を主張していた。乳房全体がふつくと丸みを帯びてきていた。そう、黒髪の少女の身体は性的興奮のなかに投げ込まれていたのだ。

「ふふっ。黒衣の貴婦人もあろうものがだらしがないのう」

一度意識してしまった身体は堰を切ったかのように快楽を脳髓に送り込んでくる。魔女の唇がついばみ、下で舐めまわす首筋が。息を吹きかけられ、唇でなぞられる耳たぶが。巧みな手つきで揉みほぐされ、内部にしこった快楽を搾り出される乳房が快楽を訴えているのだ。

それはいつてみれば前戯にすぎない。いかに巧みであろうともこれだけで女性の官能を追いつめるのは難しかっただろう。だが、己を厳しく律して生きてきた暗殺者の少女は快楽そのものをほとんど知らずに生きてきた。免疫がなさすぎたのだ。

——ああっ。こんな、こんな敵の手でえっ——。

激しい苦痛ならばいざ知らず、肉の悦びは彼女にとっては未知の快楽だった。それに対

する自分の身体の反応も知識だけのもので、対処法などは意識にすら上ったことがない。喉をそらせ、ベールに隠された顔をクシャクシャにして全身の反応を抑えようとするブラックウイドウ。「黒の未亡人」という呼び名とは裏腹に男を知らぬ暗殺者は、それゆえに初めての、そして最大の危機を感じていた。

「ぐはっ——ごほ、ごほっ——」

口枷で閉じることのできない口から生暖かい液体が流し込まれた。顔を振って拒否しようとするが、頭を押さえ込まれてしまっただけでそれはそれもかなわなかった。唇にも奇妙に柔らかな感覚がある。魔女が口移しでおぞましい液体を流し込んできたのだ。

口の中を憎むべき敵の舌が這いまわっても、それを噛みきることができなかった。屈辱と怒りに目を見開く姫君の舌を魔女の長い舌が搦めとろうとする。

——う、うそっ。こんなことって——。

ゾロリとした魔女の舌を感じるのをおぞましい、すぐにでも忘れたい感覚だったが、そこには確かに快楽がある。恋人同士の接吻でもないのに快楽を感じてしまう自分の身体に恐怖すら感じた。

「んん——。ううん」

唇を舐めまわされると肌が粟立つような快感が全身に広がる。口腔で逃げ惑う姫君の舌は侵入者になすすべもなく搦めとられ、悦楽を味わわされてしまう。身体をこわばらせて

も、粘膜同士の接触の快楽は圧倒的だった。

突然のことに呼吸が続かない少女は、ついにコココクと喉を鳴らして口腔を満たす液体を飲み下さざるを得なかった。必死で抵抗している間にも絡められた舌からは全身の力が抜けるような快感が送り込まれていた。

「ふうっ——。なかなか頑張るのう。子猫ちゃんは」

口元を拭うしぐさにも色気があった。青い髪の魔女は残酷な笑みを浮かべながらも確かに美しい。かすかに目元を染めているのが凄艶だ。女魔術師は身体をこわばらせる暗殺者の黒髪に顔をうずめるとその香りを楽しんでるようだった。

カチャリ——。いきなり口枷が外された。固定されていた顎が痛みを訴え口腔が痺れを伝えていた。唇をかみしめた少女は真っ赤な顔をベールに隠しながら宿敵をにらんだ。

「どうした。せっかく口を使えるようにしてやったというのに」

魔女が桜色の乳首を指でボタンをいじるかのようにこねまわすと、たまりかねた少女の怒声が魔女に吐きかけられる。

「ガレリアッ！ 私にクスリを使つたな、この卑怯……者っ」

鋭い口調だったが、声はほとんど出ていない。動揺するブラックウイドウの腰に手を回した女魔術師がくすくすと笑う。

「美味しかったであろう？ よく効いたようじゃ。お主がいかに魔法に通じておろうとも、

これでは魔法の呪文も唱えられまい」

大きな声を出そうとしても喉がヒューヒューと音を立てるだけだ。狼狽する少女をさらなる試練が襲う。胸や首筋を愛撫していた魔女の手がついに下腹部へと伸びてきたのだ。

「さて、この具合はどうじゃ」

——そんな、そこだけは、そこだけは触れられては——っ。

多感な少女期に孤独な暗殺者の道を歩くことを選んだ少女は普通ならば身近な女性に教えらるべき性の知識も、彼女の身分ならば侍女や側近から教えられる『姫君としての心構え』も知らされてはいない。

「や、やめてっ。やめなさいっ」

母もシェリーも、そこについては詳しいことは教えてくれなかった。とても大事な命をやどすところだから、清潔にしていなければならぬ。真にその身を預けるべき殿方以外に触れさせてはならない。書物でも姫君は顔を赤らめて読み飛ばしてしまったものだ。

その程度の認識しかなかった秘めどころに、陵辱者の指が伸びてきたのだ。必死で太腿を閉じ合わせるのだが、じりじりと開かれてしまう。全身がガクガクと震えて力を振り絞っているのだが圧倒的な力には抗すすべがなかった。二体のウッド・ゴーレムが足枷の鎖を巻き上げていたのだった。

「ふふふ、いい格好になったじゃないか？ んー？」

ついに少女の輝くばかりに白い太腿の間に隙間ができ、それはみるみるうちに広がっていく。その隙間が拳が入るほどになると、あろうことか魔女は彼女の脚の間にしゃがみ込んでしまわないか。ちろりと唇を舐め、いやらしい笑みを浮かべながら。

「み、見ないでっ……見るなっ、そんな、そんなところを——っ」

身体をよじつて少しでも魔女の指から逃れようとするが、秘裂をなぞる指の動きは意地悪く追ってくるのだ。

「ああっ……いや、いやああっ」

ちゆぷりと音がした瞬間、少女の身体が硬直した。秘裂にぴつとりと押し当てられた手指がその部分に触れ、中指が秘裂のなかに侵入しようとした音。その湿った音はまごうかたなき彼女の女の部分の発する音だった。黒衣の貴婦人のそこは濡れていたのだ。

「うふふ。このザマはなんじゃ？ くくくっ。随分気持ちよかつたんじゃのう」

そのままピトピトと秘肉を叩くようにして濡れた音を立てる指を、黒衣の淑女は退けることができない。幾多のつわものを打ち倒してきた腕も、いかなる罫を踏み越えてきた足も、今は無力だった。

「ふむ、肌の手入れはしっかりとしているようじゃの。身づくろいにはカネをかけておるなあ。じゃが肝心の部分の手入れはできておらんわ。キツイ香りがするわ」

「なっ、なんてことをっ……」

そんな辱めの言葉にも、今は抗弁できなかった。いかに薬を盛られたといっても少女の肉体が反応してしまっているのは否定できない現実だった。世の快楽から身を遠ざけてその身を律してきたはずの少女は女の肉体のもろさを初めて知ったのだ。

——く、悔しいっ——こ、こんな卑劣な仇敵にあざけられて——。

そんな屈辱と怒りのなかでも、少女の肉体は性の快楽のなかに蓄を開いていく。ためらいがちな自慰のなかですら自分を叱咤してその手をとどめてきた、あの自分をコントロールできなくなりそうな、得体の知れぬ快楽が身体のみで渦を巻いていた。

はあっはあっはあっ——。まるで犬のようなせわしない呼吸音は信じられないことに自分のものだ。繋がれた四肢はいつのまにか抗うことをやめていた。最強の暗殺者の一人と名高いブラックウイドウはわずかな時間のうちに無力化されているようだった。

「くくくっ。ブラックウイドウの名が泣いておるぞ」

ベールの下は悪人たちに恐れられた冷酷な暗殺者の顔ではなくなりつつあったが、その言葉にしろうじて怒りをたぎらせることができた。火照った頬を、未知の感覚に疼く身体を意識しながらも呼吸を整えようとする。

「ん、く。う——う？ あ、いやあああっ」

ぴとっと口元に何かが押し当てられた。濡れている。それが何か気付いた瞬間、黒衣の暗殺者はひたすら顔をそむけることしかできなかった。自分自身の恥ずかしい場所からし

たたった羞恥の液体に濡れた、憎むべき敵の指だったのだ。

「どうした。この香り、まさしく極上の処女の香りじゃぞ。味もいいし、手入れの行き届かぬ部分の苦味がなんともいえぬわ」

かあつと全身が灼熱した。ぱくぱくと口が開くが、何も言葉が出てこない。恥辱に精神を焼かれる暗殺姫の目の前で、魔女がその指を口に運びチロチロと舌を覗かせながら蜜液をしゃぶりつくす。

——な、舐めてるうっ！ そんな、私の恥ずかしいオツユを——。

潔癖な少女が目をそむけたいような淫蕩な表情だったが、なぜか目を離すことができなかった。んふ、と魔女がため息をつくのを見守る少女の顔にはすでに鋭さはない。逃れることのできない快楽と羞恥に追いつめられた哀れな娘が一人、ここにいる。

「うふふ。未通女おぼこのまままで快楽を魂の底まで打ち込んでやろう」

勝ち誇る女魔術師は冷静に丁寧に、そして残酷に繋がれた少女の身体に快楽を送り込み続ける。扇情的なコスチュームのままの囚人は身体を震わせるしかないのだ。

「か、勝手なことを、言う、なっ。あうっ——」

この相手に屈することだけではできなかった。快楽に狂おうとも、身体をとるかされようとも、この女にだけは負けるわけにはいかない。薬でかすれた声で必死に抗うのだ。

乳首がジンジンと心臓が血流を送り出すたびに疼く。鼓動はせつなくも速く、喘ぎは甘

く、うめきは恥ずかしく響く。下腹部のわずかばかりの繊毛は濡れて恥丘に張りつき、太腿はガクガクと震えていた。

「あっ」

魔女の舌がムチの傷をなぞると敏感な肌に電流が走った。敵の指が秘肉をくつろげると腰がガクガクと震えた。脇腹を撫でられると恥ずかしい嬌声が唇を押し開き、陰鬱な牢獄の壁に反響するのだった。

——わ、私のからだ、あんなに修練を積んできたのにつ。こんな肉欲なんか——っ。ベールの下で涙が浮かんでいた。だが、涙をこぼすわけにはいかない。彼女は負けるわけにはいかなかった。当たり前前の女のように涙を流すことは自分自身が許さない。

「そろそろ、気持ちよくなりとうないか？ もどかしいのじゃろう？ せつないのじゃろう？ 楽になってしまえばよいではないか」

時代がかった魔女の台詞がまるで催眠術のようにブラックウイドウの脳裏でこだまする。もどかしい——否定できなかった。せつない——そのとおりだった。楽になりたい——ああ、だが、それだけは許されることではなかったのだ。

敵の手で女の性を剥き出しにされ、肉欲のうちに崩壊を見せることなどできるわけもないのだ。母親から受け継いだブラックウイドウの名にかけて、父から与えられた使命にかけて。ミカエラ姫の、暗殺姫自身のプライドにかけて——。

「おお、身体はこれほどに素直じゃのに、心はまだまだじゃ」

乳首に魔女の唇が吸いつくとそれだけで背筋が反り、全身の産毛が逆立った。敏感な桜色の突起をねぶられると上体の力が抜けてしまう。もはや手枷にとめられた手は握ったり開いたりをするだけになり、足もかろうじて体重を支えているにすぎない。

「ふ……ふざけるなっ。き、貴様なんか……ひあっ」

反対側の乳首をひねり上げられても、桜貝のごとき耳たぶを魔女の唇に揉みほぐされても、なおも彼女は耐える。その強靱な精神の糸がこらえる限り。意志力が底をつくまで。

——だが、その抵抗力も底をつきつつあった。

奇妙な浮遊感がブラックウイドウを捉えていた。視界はぼやけ、ピンク色の霧が覆っている。平庸な女性だったらとつくの昔に快楽の頂点を迎えて楽になることができたかもしれない。しかし、彼女は強すぎた。未開発の処女地を蹂躪する陵辱者の攻撃に耐え続ければ耐え続けるほど快楽の火勢は強まり、彼女自身を焼き尽くそうとするのだ。

「くふう……だめ、もうだめっ。ダメなの。私、わたしっ」

黒衣の淑女と呼ばれた暗殺者の台詞に脈絡がなくなってきたのに気付いた魔女は一際淫らな笑みを浮かべた。その視線の先にはおびたらしい花蜜を太腿にまで垂れ流す処女の聖地があった。そこへそっと指を伸ばしていく。

「そろそろ、イかせてやろうかのう。くくっ。イクということを教えてやろうぞ」

トロトロに溶け崩れ、煮えたりながらその表面の快樂しか汲み上げてもらえない哀れな肉門はすでにふつくらと充血していた。ジユクジユクと蜜を搾り出すたびに肉の花弁が淫らにうねる。処女のものとはとても思えぬ淫らな様子を示していた。

「あひいっ、だめっ、そこには……さわらないで。だめだからあつ」

「くくくっ可愛いいう。ダメじゃない。とつてもイイことじゃ。それっ」

すでに小刻みな収縮とともに蜜液を吐き出す膣道は鮮やかな色彩のうちに絶頂の間近さを告げていた。もうどうにも避けられない状態だった。そこに駄目押しの一撃が来る。魔女の唇が無垢な姫貝に吸いついたのだ。

——イクって、だめっ。そんなこと、できないの。できないの。いいっ——。

ちゆるるるっ。淫蜜をすすりながら粘膜を吸い上げ、くつろげる。熱く濡れた秘洞に尖らせた舌を挿入されると快感が電流のように身体を走った。

刺激を待っていた粘膜が爆発的に粘液を分泌し、肉壁が収縮する。文字通り身体のかなかを火の柱が貫くような熱さのなか、黒髪の少女は生まれて初めての絶頂に達したのだった。

「ひあああ。だめえっだめになっちゃうっ！ ああん、あああ……あつ」

何よりも大切な弟を奪った怨敵の口技でとどめを刺された暗殺姫はあられもない嬌声を上げながら身体を震わせる。長い艶のある髪を振り乱しながら顔を打ち振り、恥ずかしいほどに唇を広げて肉悦の叫びを搾り出しながら。葉でかすれ、弱々しくはあつたがそれは

まぎれもない絶頂のしるしだった。

「ああ……いっ、い、イクっ。イッちゃうううう——」

ヴァギナをなめしゃぶる魔女の舌が敏感な粘膜をヤスリのごとくに責め上げると哀れな虜囚は身も世もない風情で白い肌を震わせながら身悶えするのだった。

冷たい石造りの牢獄の中に繋がれたまま、恥辱にまみれ屈辱の絶頂を迎えさせられたブラックウイドウ。力なくくずおれたまま意識すら失ったように見える身体は白い肌を紅潮させ、荒い呼吸に肩を上下させていた。

ゆつくりと立ち上がった魔女の長い指が少女の頭を飾る帽子にかかった。かすかに身動きする少女を起こさぬように慎重に取り上げる。

慎ましやかに顔を覆うベールが除かれた顔は、なおも鮮やかな朱に染まっていた。大きな目は閉じられたまま、まつげに大きな涙の粒が溜まっている。かろうじて流れずにそこにとまっている滴を、魔女は慎重に指にすくいとった。

「本当に可愛いのを。だが、まだしつけはこれからじゃぞ」

すくいとった涙をペロリと舐めとるとガレリアは少女の頬を掌で軽く叩いた。鍛えられた肉体と精神を持つ暗殺者は速やかに覚醒し、目が開いた瞬間に目をそらして唇をつぐんでしまうのだった。

「くっくっく。恥ずかしいか。気にすることは無い。わらわがお主を鍛え上げてやろう。

色の道までも学んだ、真の暗殺者にな」

「あ、くう……。き、貴様の……思い通りになど……」

目をつむったまま、少女が弱々しい声でつぶやく。だが、反抗的な態度はなおさら魔女の嗜虐趣味を喜ばせるだけなのだ。

「健気じゃのう。……じゃが、己の姿をわかっておるのか？ くっくくく」

「うっ——」

絶句せざるを得なかった。力なく壁の鎖に体重を預ける身体は汗と自らの恥ずかしい液体にまみれていた。乳房も秘所も女性の秘めるべき部分を剥き出しにしながらもコルセツトとガーターベルトが細い身体に巻きつき、淫らな眺めだった。

それでいて豪華な黒いドレスは左右に断ち割られ、そんな恥ずかしい中身を剥き身にされてしまっている。そして、彼女のシンボルでもあった帽子もベールも剥ぎ取られ、何一つ隠すことができないのだ。

——こんな辱めを受けているのに、縛^{いまし}めを受けて手足が動かないなんてっ——。

少女の刺すような視線の先にはローブを乱してすらいない仇敵の姿がある。その敵であるガレリアはにつこりと笑いながら懐から二枚貝の貝殻を取り出した。開いたなかから膏薬を指にとると、丁寧に少女の肌を彩るムチの傷に擦り込んでいく。

「ふふふ。この薬を使えば傷は残らぬ。安心するがよい」

魔女の手は、治療というにはあまりに淫らだった。まだ体内に肉悦のおき火を残していた身体は本人の意志に反して快樂の炎を燃え立たせる。

「ああつ……や、やめろ……ああんつ——」

腫れて敏感になった傷に薬を擦り込まれるのは激しい痛みと同時に奇妙な快樂を伴っていた。苦痛を耐えることのできる少女にとってはその快樂だけを感じているに等しい。

「お主とデイヴィス家の関係を答えよ」

それはガレリアのたったひとつの質問だった。ブラックウイドウがデイヴィス伯に肩入れする理由がわからないのだ。数度にわたるデイヴィス伯や周辺人物の暗殺が失敗したのは、この黒髪の暗殺者のせいだとガレリアは推測していた。

ブラックウイドウがマルト公子にこだわっていることもわかっていた。それにもかかわらず黒衣の暗殺者はデイヴィス伯の部下とは思えなかった。暗殺者ギルドに属している様子もない。あまりに不可解な存在だったのだ。

「ブラックウイドウとデイヴィス伯爵の関係は？」

「……………」

囚人の返事を待ちながら、魔女の長い指が膏薬を傷に塗り広げる。この薬は傷薬だが、本来は粘膜のためのもので女魔術師のお気に入りだった。

性奴隷を調教する際に使う、傷口をかばい癒すと同時に快樂を与える膏薬。本来は女性

器の傷やその予防のために使うものだ。傷口からならば粘膜よりもさらにダイレクトに効果が出るはずだった。

「お主とデイヴィス伯の関係を答えるのだ」

「くふっ、依頼主のことは言えないわ。たとえ——殺されたとしても」

ようやく得た返事にガレリアは満足げな笑みを浮かべていた。最初からこの程度で答えて返ってくるとは思っているわけもないが、虜囚の口数の多さは精神の余裕のなさを示しているものだったからだ。

「ああっ——。何？ この薬っ。やめてっ——こんなのいらないっ」

薬の効果に気付いた少女が身をよじって逃れようとするが、枷と鎖で四肢を繋がれてしまっているのもそれもかなわない。魔女の指が傷を撫でまわすたびに異様な快感が走って囚人を狼狽させるのだ。

白い肌に刻まれた傷に薬を塗り終わった魔女は腕を組んで黒髪の虜囚を見下ろした。口の下の豊富な身体のラインを窺わせている。見上げる暗殺者と視線が交錯した。屈辱と恥辱、そして快楽に目を潤ませながらも囚人の瞳は力を失っていない。

「お主の身柄はアルキード侯の居城に移す。それまでもっとしつけてやろう」
笑みを浮かべながらの陵辱者の視線が囚われの姫君に突き刺さる。

「私は貴様の思い通りにはならないっ」

口調こそ強いが黒衣の淑女の精神は深刻なダメージを受けていた。初めての敗北。初めての縄目の恥辱。初めて肌を晒され、肉悦までも味わわされた。衣服を剥がれ、恥ずかしい部分を晒されているのが自分だとは、認めたくない現実だった。

「思い通りにならないかどうかは、これからじゃのう。楽しみじゃ」

魔女はそう言うと言身を翻し牢獄の扉に手を触れた。やっとな解放されるかため息をついた囚人の目が大きく見開かれた。先ほどから沈黙していた二体のウッド・ゴーレムがまた動き始めたのだった。

「その木偶人形はお主にプレゼントしてやろう。なかなかの達人じゃぞ。可愛がってもらうがよい」

牢獄の扉に鍵をかけた魔女はそう言い捨てると靴音を響かせて去っていく。壁に繋がれたままで牢獄に残された少女は木偶人形の動きを目で追っていた。人形は主人であるガレリアとそっくりの動きでブラックウイドウに近づいてくる。異様に滑らかで人間を思わせる動きが不気味だった。

剥き出しのままの胸の膨らみの丸みに人形の手が触れた。思わず硬直する少女だったが、その身体の緊張も長くは続かなかつた。木偶人形は想像以上に巧みな動きで虜囚の身体をまさぐり始めたからだ。

「や——やめろっ、やめなさいっ」

かすれたままの声で人形に命令するのだが主人であるガレリア以外のものには従わないようだ。生命を持たぬはずの指がまだしこったままの乳首を捉え、やわやわと揉みほぐす。その動きはガレリアの指と寸分たがわぬとさえ思えた。

「んん——くっ、こんな人形がっ——」

黒髪の虜囚が強がつてみせるが、それもわずかな間だけだった。思い知らされたばかりの弱点、色の道に関する未熟さを突かれるとその抵抗も弱々しくなっていく。

「あ、くうう——」

ピチャピチャと恥ずかしい音が響いていた。彼女の下腹部の盛り上がりの中で、秘裂が蜜を含んで熱く濡れそぼっている。どれほど高度な技術をつぎこんだものか、木偶人形は生きた人間もかくやという巧妙さで女の弱点を責め続ける。

「はあっはあっはあっ——」

中指が媚肉の狭間にめり込んだまま、人差し指と薬指が淫唇をはさんで擦りたてる。指は襞をなぞったかと思うと中指が少しだけ沈み、膣口を巧妙に刺激するのだ。

男どころか、命すら持たない人形に罵られる屈辱に歯噛みしながらも身体の疼きは増幅されてしまう。あまりの情けなさに優美な眉毛が悲しげな弧を描いていた。

「あうっ——な、何、この感覚——っ」

ムチの傷に触れられたときの感覚は異様だった。魔法の薬だけあって治癒がすでに始ま

つていたが、触れられるたびに身悶えするような快楽の波紋が全身に広がってしまった。

ツツツと傷を人形の指が撫でるだけで秘裂が甘く収縮し蜜液を吐き出してしまふ。すでに痛みはほとんどなく、ジンジンとした疼痛がそのまま快楽に転化してしまっているような気がした。

——くやしいうつ。自分の身体——なのに、わ、私の意志に——あああつ——。

苦悶にも似た表情は快楽に喘ぐ女と肉悦に抗う暗殺者の間を行ったり来たりしている。すでにどれだけの間人形にいたぶられているのかわからなくなっていた。飽きることを知らない魔物は左右から、前後からいたぶりの手を伸ばすのだ。

「あつ——いやつ。そこ、もう——」

ピンピンにしこった乳首が、秘裂の頂点に震える肉真珠が追いつめられていた。疲れることを知らない擬似生物が快楽のボタンをこねまわす。これまで慎ましやかに閉じていた秘部が開かれ、濡れ、熱い蜜を滲ませ、ヒクヒクとその部分がうごめく感覚。

その感覚が膨らみ、弾け、女の身体を責めたてると口惜しくも声が漏れてしまふ。

「く、うううつ。あ——あつああああ——つ」

何度目の絶頂だろうか。火照りのさめやらぬ身体は次々に快楽を弾けさせた。一對の木偶人形はあまりに的確な連携プレイで女暗殺者に回復の暇も与えずに責め続ける。

どんなに必死に隠そうとしても、木偶人形たちは身体の奥に眠っていた快楽を探りあて、



ほじり出してしまふ。全身をくまなく這いまわる指はしらみつぶしに性感帯を探しているのかもしれない。

「はあつはあつはあつ——」

いつのまにか「魔道士の呼吸」もできなくなっていた。快楽に翻弄されるうちに身体のコントロールが利かなくなっているのだ。

「うふふ——。いい具合に練れているようじゃの」

自分以外の言葉を聞いたのは久しぶりのような気がした。魔女の声に自分を取り戻した少女は荒い呼吸のなか、敵意を燃やして怒りの表情を浮かべる。

「ほう、まだそんな顔ができるのか。よいぞ、ブラックウイドウよ」

魔女はムチを手を取っていた。ベッドの上には空になったあの膏薬入れの貝殻と、まだ封を切っていない貝殻があった。

「くくっ。気付いたか？ 高価な薬じゃ。しかと味わうがよい」

やめるなどと言っても逆効果なのは目に見えていた。傷が治りつつあるところにまたムチを受けたとき、どれほどの苦痛があるのだろう。だが、そこには苦痛以外のものが入っているのは間違いない。そちらのほうが恐ろしかった。

無言の姫君の喉が鳴った。その目はまだ怒りと敵意に燃えていたが、その目の光には怯えと、かすかな期待が覗いているようだった。

ようやく解放された秘所はなおも粘液でぬめ光っている。ピンク色の清楚なヴァギナは赤く充血し、可憐な淫唇は潤いから解放される時間がないかのようだった。その敏感なままの女性器がかすかに収縮した。

「が、我慢などしていないっ」

その性急な口調が女囚の動揺を表している。ガレリアは赤い唇に淫蕩な笑みを浮かべながら少女の下腹部を指で押した。ピクン、とほっそりとした身体が硬直した。

「我慢していいない、ねえ？ ウソをつく悪いコには、お仕置きが必要じゃのう」
「ウ、ウソなどついていないっ」

上ずった口調で否定するミカエラだが、幾度も下腹部を押し込まれるうちにせつなげな表情になってしまっている。呼吸に合わせてお腹が苦しげに上下した。それを見ながら女魔術師は嬉しそうに唇を舐めた。

少女の甘い体臭には淫らなメスの匂いがまじっている。わずか数日前に処女を破られた哀れな姫君の下腹部に顔を近づけた魔女は濃厚な淫臭を胸まで吸い込み、鎖で身体を固定された囚人を狼狽させた。

「くくく。こちらが我慢できなくなっているのではないかと思うのだがな」

ピクン、と太腿が震えた。閉じ合わせることができないように固定された腿の間、女の聖域を魔女の指がなぞっていく。三角帽子から顔を覗かせている可憐な肉真珠、小さくす

ぼまった。ピンク色の尿道口、膣口を経てさらに指は下へと向かう。

「や、やめろっ。そ、そこは汚いから——っ」

わずかばかりの自由を駆使して腰をひねり指をかわそうとするミカエラだったが、ピシヤリと腿を張られて抵抗を封じられてしまう。続けざまに腿を叩かれるたびにビュクビュクと牝肉が収縮して恥液を秘裂に滲ませてしまうのだ。

「くくくっ。汚くなんかないだろう？ お主はもはやこちらでの排泄をしないのだから」
ツプリッ。チュプチュプッ——。尻肉の狭間の恥ずかしいすぼまりに中指を添えたガレリアがゆつくりと輪を描くようにしてアヌスのマッサージを始める。

「くふっ——。こ、この変態っ」

ピシヤリと身体を叩かれるたびに、苦痛以上に鋭い快楽が彼女の神経をえぐる。苦痛への耐性を持つ暗殺者にとっては、白い肌への責めは快楽そのものとなっていたのだ。

倒錯の快感に身悶える女囚。颯り続ける魔女の指がアヌスを押し込むと、柔軟にへこんだアヌスの輪状筋肉の先に何か硬いものが触れる。

その瞬間、暗殺姫の顔が悲痛に歪んだ。コッソ。かすかだが、硬いものが触れ合う音。さらなる恥辱に身体をこわばらせる少女の体内に異物があるのは明白だった。

「ふふふっ。これはなんじゃ？ 伯爵公女様」

底意地の悪さに憎悪すら覚えるが、この女は大事な双子の弟の命を握っているのだ。

「し、知らぬ。——き、聞くんじゃないっ」

予想どおりの言葉に笑みを浮かべるガレリア。その指が女囚の蜜液を潤滑油にしてアヌの愛撫を続けていく。その上で下腹部を押し下りたりして残酷な刺激を加えるのだ。

——だ、出したい。けど、敵の前でっ。この私が——っ。

少女はこの数日排便をしていない。直腸内に寄生する寄生虫が腸の内容物を栄養として食ってしまうからだ。だが、寄生虫として食べたらずばなしなわけではない。入るものがあれば出るものも当然あるのだ。

下腹部とアヌスへのマッサージの効果は目覚しく、少女の腹の中からキュルキュルとかすかな音すら聞こえてきていた。少女は確かに便意を覚えていたのだ。実際には排泄するものなどないにもかかわらず、身体は決められた通りに排泄をしようとするのだ。

「何やら異物が入っておるのお。取り出して見ることにしようではないか」

呼吸の合間の一瞬についてニユルリと中指がアヌスに侵入する。菊座の入り口を指に擦りたてられる快楽に身震いする。厳しく締めつけて侵入を防ごうとしていた少女は強く締めれば締めるほどに自分が快楽に追いつめられてしまうのだ。

「くひいつ。や、やめないかっ。卑怯者があつ」

——こ、こんな恥ずかしいところで感じるなんてっ——。

グチュッ、ニチュニチュッ。直腸の内壁を引っかき、かきまわす指に翻弄される。尻穴

から全身がほぐれてバラバラになってしまいそうな異様な快感のなか、排泄の欲求はますます高まってしまふ。全身を拘束され、宿敵にヒクつく菊門を見物されながら――。

「くくくつ。そろそろよいか。さあ、見せてみよ。お主の恥ずかしい姿をな」

魔女に嘲笑されながらも快楽と排泄の感覚は交じり合い、さらに高まっていく。

「あつ――く、んんっ……いや、いやあ……」

チュプリと音がして魔女の指が引き抜かれたときには下腹部の痛みは激しくなっていた。白い肌には脂汗が浮かび、アヌスはせつなげに収縮を続けている。

クン、と内側から何かアヌスの括約筋に触れた。硬く、暖かくそしてポリウムのある物体がミカエラの体内でぶつかりあいながら出口にたどりついたのだ。直腸の蠕動運動ぜんどううんどうにより排泄の欲求がますます強くなり、羞恥のすぼまりはまるで呼吸しているかのようにヒクヒクとうごめいている。

――だ、だめえ。このままじゃ、卵がっ――。

そう、少女の直腸を犯しているのは、おぞましい寄生虫の卵だったのだ。腸の内容物を栄養とする寄生虫は早くも卵を生んでいた。

「い、いやあつ。こ、こんなのつ、くううつ……んんっ」

だが、腸内に伸ばされた触手が内部からも刺激しているために快楽も排泄欲求も増幅されてしまっている。ガレリアの目の前でヒクヒクと震える菊門がほころび、薄墨色の内側

の鮮やかな肉層を覗かせ始めていた。

「ほおら、開いてきたぞ。いよいよじゃな。ふはははははっ」

菌をくいしばり、括約筋を食い締めるべく力を入れる女囚だったが、内部から屈辱の球体を押し出そうと粘膜が痙攣し、筋肉のリングの開口がミリミリと直径を増していく。

固定された身体をのたうたせながら苦悶する虜囚の身体の中でズキンと鈍い痛みが走った。いや、痛みだけではない。その異様な感覚はかすかな甘い官能を伴っている。

——な、何、この感覚？ まさか——まさかっ——。

女体の奥深く、子宮口が内側からこじ開けられそうだ。背筋に冷たいものを感じながら声を押し殺す女暗殺者は何が起こっているかもわからない。

「ほおっ？ まさか吸精虫までもが卵を生むというのか。ははははははっ。これはいい。人並み外れた鍛錬と魔力が仇になったようだな」

伝説の吸精虫はごく上質の精気からのみ卵を生むという。鍛え上げられた金髪の姫君の精気は極上のものだったのだ。

「そ、そんなあつ、吸精虫は滅多に卵を生まないはず——あうううっ」

子宮頸部がじわじわと押し広げられ、内部から何かが少しずつ押し出されていく。本来なら鈍い内臓感覚しかないはずのその部分が粘膜をこすられる悦楽に震えていた。数日にわたる吸精虫の寄生は少女の胎内までも淫らな快楽器官に作りかえつつあった。

「あぐっ。こ、こんな——卵だなんて。ま、魔物のっ——」

ヌルリと熱く潤った悦楽とともに異物が子宮口を越えた。卵の大きさまで拡張された子宮口が緊張感と快感を同時に伝えてきていた。

「お主の卵巣から受けたエネルギーを核にした卵じゃ。文字通りミカエラ姫の精気が凝集したわけか。貴重な初生み卵じゃ。面白いのう。ふっふっふ——」

ぴちゃぴちゃっ。肉と粘液の恥ずかしい合奏だ。手伝いと称して身体をまさぐってくるガレリアの手にも抵抗はできない。快楽と屈辱の高まりのなか、ミカエラはガレリアの言葉麁りに対する口答えすらできないほどに追いつめられていた。

「い、いやっ——ああっ、痛いっ……ああ、痛いのにつ——」

わずか数日前までは男も知らなかった自分が、今や『出産』までも体験させられようとしている——。信じがたい状況、ありえない境遇。かりにもデイヴィス伯爵の長女たる自分が地下牢で淫虐ないたぶりを受けて恥ずかしい声を上げているのだ。

「くくくっ。よい身体じゃ。こんなときにも乳首はピンピン、牝肉もプリプリと牡を求めようごめいておるわ。最強の殺し屋も淫乱奴隷の資格十分じゃのう」

膣道を降下していく卵の感触は敏感な膣内粘膜からこの上なくリアルに伝わってくる。その表面のわずかなザラつきまでもが少女の全身を震わせる。コルセットに強調された乳房は全体がふっくらと量感を増しているようだ。女の機能が狂わされているのだ。

「ああっ——大きいっ……んんっふう——っ、お、大きいのおっ」

吸精虫は女をいつでも発情させ、その精気を吸って成長する魔物だ。妖虫の仕業だとわかっていても黒衣の暗殺者にも今はどうにもできない。

「そら、もう生まれるんじゃないのかえ？」

「そ、そんなことないっ。た、卵なんか——あ、はあん——っ」

耳に息を吹き込まれてビクリと痙攣する。少女の秘肉はあふれる淫蜜で大洪水だ。その淫汁はぷつくりと膨らみながらヒクヒクと震えるアヌスまでも濡らしている。

ガレリアの片手が秘所に伸びていき、秘裂を割るように秘肉を押し広げる。その屈辱の感覚にも燃え上がるマゾヒズムの快楽は、指の腹で擦られる敏感なおサネの悲鳴にも似た激しい肉悦のなかで沸騰しようとしていた。

「くひいひい——っ！ いや、いやあ……だ、だめなのにつ」

秘裂に分け入った中指がコツンと膣道を進む物体をつつくと、その衝撃は快楽粘膜によって増幅され、薄い壁を隔てたアヌスの快楽を一気に押し上げる。

黒衣の貴婦人。冷酷かつ慈悲深い暗殺者と呼ばれ、驚嘆を込めて呼ばれてきた自分。デヴィスの双子石と呼ばれ、賛美と嫉妬の視線を浴びてきた自分。なのに今、彼女は羞恥と屈辱のうちに腹中からおぞましい生き物の卵を生み出そうとしていた。

「そらそら。もう卵が顔を覗かせているぞ、ミカエラ姫」

魔女の指がニチャニチャと羞恥の源泉をいじると金髪の女囚は狂ったように顔を振りたくり、自由を奪われた身体をよじらせる。

「あぐうつつ！ だめだつてばつ、ああつ——ああつもう出ちやうつ——」

少女が鳴いた。宿敵に嬲られながら、異形の生物の卵をアヌスから覗かせながら。

「ははははつ。卵を覗かせながらヒクついてゐるぞ、淫売がっ」

キュウウウウ——ブリュブリュブリュッ！

激しい収縮にアヌスから卵がはじき出された。同時に牝肉が激しく収縮し、ジュブジュブと内部から淫蜜をあふれさせる。少女の悲鳴は途切れながらも続き、長い、長い異形の快樂が少女の身体を支配していた。

「あつ、だめ、生まれるつ。前も生まれるううううつ」

悲鳴にも似た叫びとともに、鮮紅色の狭間がぐいぐいと押し広げられた。牝臭の香り立つ淫らな肉穴から鶏卵ほどもある白い球体が粘液をまとい顔を出す。美しい肉層がこらえがたい拡張の快感にヒクヒクと震えていた。

——いやあつ。私、人間なのに！ ま、魔物の、魔物の卵をおつ——。

妾腹とはいえ王家の血を色濃く引く女性が、今まさに魔物の卵を生み出そうとしていた。快樂のなかにも悲痛な表情が魔女の欲望をさらに刺激する。

「はあつはあつはあつ——た、たまごおつ、たまご出ちやうつ」



頬に押しつけられたペニスは一際熱く、硬い。にじみ出る精気は新鮮で、なおかつ濃厚だ。思わずむしゃぶりついた美女の髪にポタリと熱い滴が落ちる。

「ブ、ブラックウイドウなんて——犬や猫よりも淫らで——いやらしくてっ」

縛られていたはずの男の子がそこにいた。涙で顔をクシャクシャにしながらも、燃え上がる劣情を抑えきれずに憧れの女性の顔を抱え込んでいる。無心に自分のものをしゃぶる女に我慢がならないのか、その身体はブルブルと震えていた。

もはや女囚は少年を認識していない。そこにあるのはただ、自分に好意とせつない感情を寄せてくれている、好ましい牡の気配。チュブチュブと自分から喉奥に受け入れる若いペニスは彼女の愛撫にヒクヒクと震え、濃厚な先走りの液を滲ませていた。

細い指が男根に絡みついていた。男根に吸いつくような柔らかな皮膚が、貴族の娘の滑らかな手の感触が牢獄で仕込まれた技術で牡の快楽器官を擦りたてる。それはもはや熟練の娼婦にも匹敵する技術で、男たちの股間に鋭い快感電流を発生させた。

「な、なんだ、この手——。う、うまいぞ、この女っ」

白い女体に群がった男たちはその鍛え上げられた細い美しい肉体と、その淫らな動きとのギャップに狂喜していた。手を伸ばし熱い乳房を揉みしだき、滑らかな肌を狂ったようにしごきたてる。甘美な感触に男たちの息も荒い。

「あひっ……む、胸だめへえっ！ タプタプしないでえっ」

硬くしこった乳首がつままれると、汗にまみれた肌に電流が走った。明らかに量感を増した胸肉をこねまわされると身体の内側までもゆすぶられているようだ。激しい興奮にふつくらと量感を増した双丘の頂点では乳輪も色鮮やかに浮き上がっていた。

「ひああつ。おっぱい突き刺しちゃだめえっ」

狂暴に反りかえったペニスが柔らかな乳肉に擦りつけられる。熱くぬめるカウパー腺液が少女の匂い立つ汗とまじり、形よい丸みを帯びた乳房を淫らに彩った。張りつめた肌に押し返されるペニスがビクビクと震え、こねまわされる乳房がニチュニチュと粘液質の音を立てて形を変えるのが淫らだ。

「メロメロじゃないか。こんなエロガキが世界屈指の殺し屋とは、笑わせるっ」

白い肌が震え、つややかな黒髪がハラリと喉元に、肩に落ちる。赤い唇は無心に若い牡を貪り、少年に幼い快楽のうめきを上げさせている。快楽器官の奥に潜む吸精虫の触手までも擦りたてられながら、崩壊に向かって上りつめようとしている。

お尻の奥ではちぎれそうな圧迫感が急速に高まっていく。魔女に貫かれたままの直腸の最奥が膨らみ、卵を押し出そうとしている。アヌスに向かって内側から攻め寄せてくる快感が溶けかけた意識をゆさぶる。

——す、すごいのおっ。き、気持ちいいっ。身体中、アソコも、お尻もっ——。

腹中の魔物はこの数日排泄——産卵を許されぬままに溜め込んでいたのだ。それが魔女

の魔力の信号によつて一気に産卵を始めた。鶏卵大ほどもある卵が粘液にまみれながら触手に押し出されるようにして腸内を下つていく。

「たまごっ、たまごでちゃうっ！　そ、そんなことおおっ」

うわごとのように叫びながら黒髪を振り乱して悶え狂う女体だが、不自然な体勢で押さえ込まれているために開脚状態の脚はほとんど動かない。

群衆の視線が集中するなか、淫らにヒクつくアヌスから粘液の糸を引きながら引き抜かれる長い指。思わず尻が魔女の指を求めて動いてしまつていた。

「ああっあ——っ、ぬ、抜かないで、あひいっ……抜いちゃだめへええっ」

ヒクヒクッ。菊座がその可憐な様相を一変させ、内部から押し開けられるかのようにポッコリと膨らむ。クイクイと必死の締めつけでこらえてはいるが、内部からの圧力は圧倒的で、ヒクヒクと動いたびに内部から腸液がピュッピュッとまるで小さな水鉄砲のように噴出するのだ。

——く、くふうっ……身体の中が溶けて、ドロドロになつてる——！

両手に、乳房に、頬に。快樂の火花が弾けている。口にお腹に、ヴァギナに。肉悦の大波がうねっている。太腿に、髪に、アヌスに。快樂電流が火の柱をかけるのぼり、快樂の炎はその白い身体を焼き尽くす。

髪に男根の先走りの液がねばりついているのも快感だった。口腔で少年の熱いペニス

ヒクヒクと痙攣するのは喉を埋めつくす悦楽。乳首を押し潰され、太腿に熱いペニスをこすりつけられるのは子宮をつかみあげられるような快美感だ。

ニユブツ——チュプチュブツ！ ジュルジュル——ツ。

手の中で痙攣する男根が愛しかった。膣内で男の指に捕らえられた触手が容赦ない責めに悶え狂いながら、内部から女体を狂わせていた。

「それっ、尻から卵をひり出しながらアクメ顔を晒すがよいわっ！」

ビシイイイッ——！ 魔女がムチを太腿に弾けさせると、姫君の我慢の糸がプツリと切れた。ムチ打ちの奇妙にヒリつく苦痛まじりの快感と一緒に、アヌスが内側から大量の粘液と卵によって決壊していく快感が自尊心を引き剥がし、ボロボロに引き裂いていく。

「あぐうああつ、あ、あひいいいい——た、たまご出るううううううっ！」

高く澄んだ悲鳴とともに内部から押し込まれ、ぷっくりと膨らんだアヌスがはぜた。痛いほどにしこった乳首が、クリトリスが脈動し、牝肉全体が激しく収縮する。溜まりに溜まった快感が風船が弾けるかのように一気に全身を覆い尽くす。

ブリユブリユブリユウウッ——！ ジュポッジュポジュポオオオッ——。

大量の粘液とともに卵が内部からはじき出される。しかもそれはひとつではない。一つ、二つ、三つ——。そのひとつごとにガクガクと喉が反らされ、獣のごとき絶叫がその唇から漏れる。恥も外聞も、プライドさえもかなぐりすてた絶叫だった。

「イ、イクウウッ！ 身体中、いっぱいいい。たまごもいっぱいイクのおおっ」
あさましい、生々しい嬌声とともにその全身が大きく震えた。全身の筋肉が緊張し、次の瞬間快楽の極大値に達した女体がミカエラの制御から離れて暴走する。

ヒクヒクッ……プッシャアアアアア——ッ！

「ああんっ、あ、熱い精液、男の人のスペルマくださいっ、いっぱいくださいいいっ」
激しく淫蜜を噴出しながら、絶頂快楽の宣言を叫び続ける少女。ガクガクと身体を震わせながら、細い尿道から、淫乱粘膜から、全身の柔肌から精気と快感を取り込む女体は同時に群がる男たちにも快楽の引導を渡していく。

「うおおっ、で、出るっ！ すぐえ気持ちいいぜっ、エロ殺し屋さんよおっ」
ビクン、ビクビクビクっ！ ドバドバ、ドッバアアアアア——ッ！

男たちの射精はほとんど同時だった。手で、髪で、太腿で、激しく収縮を繰り返す肉棒が熱く濃厚な白濁液を空中にしぶかせ、白い肌と黒い下着を塗り込めていく。飛び散る熱いスペルマが敏感な肌を焼き、熱い精気が蕩けきった快楽中枢を焦がすのだ。

「あっあふうっ——イイの。エッチなところイイのおっ、恥ずかしいの、イイッ——！」
無意識のうちに身体が男たちの肉凶器を愛撫し、巧妙に精を搾り取っていく。少年のペニスを愛しげに舐め上げながら。射精中のペニスの裏筋を指で圧迫しながら根元から擦りたてて精液を搾り出している。白濁にまみれた淫らかな眺めだった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>